

加代が東京へ出向いたのは、一度だけだ。七年ほど前、入学する大学が決まったときで、下宿を探すためだった。浩史と一緒に朝早く高松駅を出て、東京駅に着くなり大学へ直行し、学生課の紹介リストを片手に足を棒にして物件を見て回った。予算に合う安い部屋を決め、すぐ手続きを済ませ、慌しくその日に最終の新幹線で戻ってきた。

半月後、浩史は前もって数個の荷物をアパートへ向けて発送しておいてから出した。

「駅まで付いて来なくていいよ。幼稚園の遠足じゃないんだから…」

出掛けに浩史は言った。加代はそれでもサンダルをひっかけ、家のブロック塀のきわまで出て見送った。道は数軒行ったところで右にカーブして大きな通りに続いていた。曲がる手前で浩史はちらっと振り返り「じゃあ、またなっ」というふうに白い歯をみせた。

だから息子のあちらでの生活を何一つ自分の目で見ていない。加代は暮らしぶりを推しはかるすべもなく、もどかしい思いに駆られることもある。

四年後、大学をでた浩史は三十倍近い難関の映画会社に入社した。大学の在学中にダブル通学をして映像研究所を卒業していたので、希望通りの就職ができたようだ。会社では編集などをおこなう化学現像部に所属した。地味で根気のいる技術職である。

浩史は勤めのかたわら自分の映画創りに打ち込んで、給料の大半は機器の購入と制作費にまわし貧しい生活を強いられていたようだ。それでも、暮らしが安定したことに変わりはないと、加代は安心していた。

入社して最初の夏、浩史は帰ってきたが学生の頃より痩せて色白になり、長身が

いちだんと目立つようになっていた。夕食のときビールでほんのりと頬をそめ、母親の手料理を食べながら、いつか脱サラして思うように仕事をやりたいと息巻く。やっと職に就いたばかりなのに、もう次の夢を思い描いているようだ。家族思いで何事にも慎重な性格だった夫の憲志がもし生きていたら何と言うだろうか…。給仕をしながらもっぱら聞き役にまわる母親の前に、浩史の語氣に力が入る。その声になぜか実家の父、政一の影が重なってくる。強気で事業に熱中していた頃の父の口調を思い出させる。

父は電気関係の仕事をしていたが、経営のやり方は足が地に着いたものとはいえなかった。加代が結婚して家を出た後も家業は紆余曲折を繰り返し家族は苦労を余儀なくされたものだ。浩史はその政一の孫、やはり血は争えないのか…と加代は思った。浩史はその頃から独立の準備を本気で始めていたようだ。

それから三年経った今年の春、浩史はためらうようすもなく会社を辞め、自営で職中と同じ映像制作の仕事 시작했다。息子が独立するといっても加代は少しの援助もしてやれない状況だ。暮らしていけるだけの収入は得られるのか。それなりの技術と信用はあるのか。「もう大人なんだ、無鉄砲なこととはしてないから心配するな」そう電話でなだめられても加代は不安がつる。そっと見守ってやるのが自分ができる只ひとつのことだと、梅雨頃になってようやく悟った。

それでもいつもの習慣で、盆の前にはメールを送った。予想通り帰らないとの返事がきた。加代はその夜こちらから電話をかけた。

「あゝ、お母さん…。なに……」

浩史がすぐにでた。元氣そうだ。加代はふっと肩の力が抜けた。

開業前からとれていた仕事、イラクを撮った最前線のドキュメンタリー映画の編集が入り、しばらくは忙しいとのこと、耳を澄ますと、作業中らしく声のバックに何か雑音がしている。部屋には何台もの機器が置いてあるという。

「とにかく、体には気をつけてね。…それから…」

加代はふっと口ごもり、とっさに思いついた冗談のように続けた。

「…もしも、うまくいなくても、ホームレスになる心配だけはないよ。ここへ帰ってきたら、ご飯と寝るところだけはあるんだからね」

「おれは大丈夫。危なっかしいのはお母さんのほうや」

浩史は電話の向こうで明るく笑った。

そのときの屈託のない声が脳裏に蘇り、加代の面にはひとりでに微笑が浮かぶ。それからゆっくりとパソコンを閉じ、立ちあがった。

空のようすはどうだろうか。窓を開けると冷気が流れ込んで赤みのない加代の頬をこわばらせる。いつのまに陽が陰ったのか、空は灰色の重たげな雲に覆われ白いものがちらついている。

目線を下げると、道路の右手、踏み切りの手前にある税理士事務所が目に入った。

ちようど加代の部屋の部屋の真向かいだ。休日業務を売りものにしていたようだが、今日は珍しく休みなのか、どの窓もブラインドがおりていた。

その事務所は踏み切りと道と線路に挟まれ、大きな三角定規のような敷地に建っている。二十坪足らずの古い木造の平屋で線路を背にしてこちら向きだ。家屋は土地の形に矩形を合わせぎりぎりに建てられているので、奥行きが浅く間口ばかりが異様に長い。加代のいる建物と傷み加減はいい勝負だろう。

少し反り気味になったスレート瓦を見おろしていると、踏み切りの警鐘が鳴りだした。しばらくすると下りの電車がやって来る。銀色の車体が透明な風を巻き込んで事務所の背面すれすれに走り抜ける。その瞬間、建物は風圧に浮き上がったように見えた。列車は三両編成の特急『うずしお』だ。瞬く間に踏み切りと宮の森駅を通過していく。それを見とどけて、加代は窓を閉め内からロックをした。

翌朝、加代が出勤すると同僚の佐知子はすでに入室してがらんとしたフロアはエアコンでほんのりと暖かくなっていた。加代は更衣室に入りエプロンをつけ始める。佐知子はいつになく明るいい表情でドアのところから加代をのぞき込んで言った。

「私ね、再就職、リリーキッズ、に決まりましたよ」

加代はロッカーの前で向き直りお祝いを言う。佐知子は定年を目前に控え、かねがね次の仕事を捜していた。毎日、気を揉みながら応募の結果を待っていたところなのだ。リリーキッズは私立の保育園だそうで、郡部にあるので通勤が不便だし、二十四時間保育のため当然、夜勤もさせられると佐知子は条件の悪さををこぼす。

「でも、少々は我慢しないとねっ。物入りの息子を抱えていますからねえ」

いつもの口癖だ。佐知子の長女は来春には地元の短大を卒業するが、長男はこんど大学に進学するらしい。佐知子は何か言うとは必ず娘と息子のことを引き合いに出してくる。

託児所の職員は佐知子の他に助手の理恵と沙紀がいるが、二人ともまだまだ若い。次に辞めるようになるのは自分だと加代は思った。来年は五十歳、この先いつまでもこの職場にいられるわけではない。ここを辞めた後はまた保育の仕事に就くのは

難しいだろうと覚悟はしている。佐知子が再就職できたのは幸運といえる。自分
はせめてあと五年間は無事に勤めあげたい。

始業のチャイムすれすれに他の二人が出勤、簡単なミーティングをすませて仕事
にかかる。

午前のワークタイムは折り紙などをさせて過ごした。昼食時はいつものように
母親たちが出入りして落ち着かなかった。午後の昼寝にはいつてほっと一息つく。

その後はおやつを食べ、自由遊びになり、あとは母親の迎えを待つばかりになった。

加代は美帆に会ったことを同僚たちに話した。

「私はいつも美帆ちゃんのお漏らしの始末をしてたんですよ。それがまあ、バレエ
だなんて…二十年後にはひよっとしてプリマ？」

堅実派の佐知子も調子づいて狭い職員室は一挙に春が来たように賑やかになる。

日がとつぷり暮れた頃、加代は混んだ電車で帰途につく。うつむきかげんのまま疲
れた足で踏み切りを渡ろうとしたとき加代はふと立ち止まった。何かがいとも違
う。顔をあげた。すぐ右手の税理士事務所の明かりが点いていないようだ。

いつもなら帰りのこの時間には大きくしつらえられた事務所の窓から煌煌と眩
いばかりの明るさが路面に広がっている。その前を通りながらそれとなく目をやる
と年配の税理士が書類のうず高く積まれた机に向かって仕事をしていた。ときには
女性事務員が居残っていることもある。加代は事務所の前で足元が明るさにさらさ
れると、ようやく自分の棲みかに戻ってきたようでほっとさせられたものだ。

“今日は早じまいかしら” 加代は暗さのなかを通り過ぎ、弱い光を放っている
外灯のきわを曲がって集合住宅の広い駐車場へ入った。隅のほうに車が一台止まっ

ていた。三階建ての建物に明かりの漏れている窓は二つだけで消え入りそうに静ま
りかえっている。

帰宅するとすぐにパソコンを立ちあげた。着信はなかった。浩史は忙しくて昨日
のメールをまだ読んでないのだろう。加代はパソコンを閉じ台所にたつた。

夕食の片づけなどを済まして十時頃ベッドに入った。枕元の棚に美帆からもらっ
たキャンディが載っていた。加代は豆電球の明かりの下で薄赤く光っている小袋に
手を伸ばす。封を切ると果樹の甘い香りが漂ってくる。それを口に含むと美帆の
笑顔が目に見えた。

託児所で預かっていた頃、美帆はよく柔軟体操のようなことをして遊んでいた。

それはバレエの練習だったのかと今にして思い当たる。ときには優雅なポーズもあ
ったようだ。両腕を高く掲げて頭の前に空でも囲むように大きな円をつくる。両の
中指の先が少し離れているので形はたわわな花束を囲んでいるみたいにも見える。
足は左右が交差している。そのまま白い衣装を着け頭に宝石の付いた冠をのせれ
ば、もう立派なバレリーナだ。加代はステージに立つ美帆を想像した。その美帆の晴
れ姿は、幼い頃に加代が実家で見えたポスターの写真の思い起こさせた。

(以上11月14日放送分)